第四講　「要約」する

次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

よく、学問は疑いから始まるといいます。だから万事疑うことが重要だと。その通りです。決して間違っていません。だが正しいことが間違って受け取られて大違いのもとになることもある。学問的発見の創造現場に立ってみると、疑いの前にというか疑いの底に信ずるという行為があって、その信の念が「疑い」を創造に生かしている。そういう仕組みになっているので、その面の理解を欠いて言葉だけを受け取ると、正しくはあっても肝心の創造、ささやかながらも自分でものを見、一個の自由な人間として何かを創ってゆくには役立たぬ空語になります。

新しい学説の生誕という、大状況での学問的事件の場合でも、およそ創造の現場に立てば同じで、それについても後に申し上げるつもりですけれども、大学者の大学問創造に関する大議論は別として、お互い「本を読む」という当面の実際問題としても、いったい、本は、最初から疑いの眼で接して読めるんでしょうか。試しにちょっと、——仮説的に私を信じて——

考えてみて下さい。「学問は疑いから生れる」という真理をう呑みにして、役立たぬ形でもたれかかっていたなあ、と気づかれるかも知れませんよ。

　古典は一読明快ではない。深く、踏みこんで読まねばと、さきほど申し上げました。古典の真髄、古典の古典たるゆえんは、踏みこんで、深読みして――本文との格闘をくりかえして――初めてわかる。それは御了解いただいたと思いますが、しかし、信じてかからなきゃ踏みこめないじゃないですか。「適当に」しか読めない。疑い深く白眼視しながら踏みこんで本文と格闘するなんてことはできない。それ自体矛盾しています。いわんや、分らぬところを二度三度、時間をかけて根掘り葉掘り深読みの労を払うなど、馬鹿馬鹿（ばかばか）しくってできるわけないですね。何か期して待つところがなきゃ。信ずるところがあって初めて、読み深めの労苦が払える。

　も少し、さしあたって手ぶらで考えられるかぎりで問題を煮つめておきましょう。いま、ちょっと見たように、信ずることがなければ読み深めの労は出てこないが、それよりもまず、労を払って解くべき問題・事実そのもの――解読すべき本文の字句――が、信の念がなければハッキリした形で目に映ってこない。

　たとえばAさんの本を読んでいて、おかしいなと思うとき――あるいは思うところは、誰にもいっぱい出てくると思いますよ。

　ここでＡさんがいっていること——事実あるいは解釈——は、私の了解しているところと違っている、おかしいなとか、ここにはこう書いてあるけれど、たしか他のところでは別のことをいっていたと思うがなあとか、あるいは、つじつまの合わんこと、あるいは関係のないことが同じこのパラグラフのなかにあるとか。その他、多少読みつけてくると、段落と段落あるいは章と章との関係ですね、さらには全体の編別構成。そのかかり結び——と私は名づけています。コンテクストとかテクスチュアといってもいいでしょう——がハッキリつかめないとか。要するに文章解読法の鍵になる（かも知れん）いくつかの箇所ですね、具体的な。

　文章についてそういう事実（と思われるもの）の発見があり、そこに何故という疑問がおこる。そして、その疑問を解くための探索が始まる。それはそうなんですけれども、その「事実に対する疑い」が、現実に、ある具体的な事実に対するはっきりとした形の「疑い」として読み手に提起され、その「疑い」を解明するための労苦を要する行為に結実してくるためには、その（疑いの）底に信ずるという情念・信の念が働いていなければならないでしょう。一つには、ここにはたしかに私にこう読めることが書いてあるけれど、それはどうしても変だという、自分の読みに対する信の念が。そしていま一つ。Ａさんほどの人が出たらめを書くはずがないとい

うかたちでの、著者に対する、これまた信の念が。

　この二つの面での信念に支えられて初めて、疑問が、ある事についてのハッキリした形の疑問として起り、それを解くための苦渋にみちた探索が始まり、また持続するわけです。事実を執念深く確かめてゆく操作のなかで、この二つの面での信念も、それぞれに確かめ直されて中身も変ってくるわけですけれども、それにしても、あらかじめ、端緒において、漠たる形であれ、行為へと人をうながさずにおかぬ強烈な信念がなければ、読み深めの行為どころか、そもそも解明すべき事実なるもの――ここにこう書いてあるがそれは変だというそれですね、さしあたって――すら、ハッキリした形では浮かんできません。何となく変だという感じで終ってしまう。

　漠然たる疑いは、そのままでは解きようがない。問題が、解明を要する問題としてハッキリとした形で読み手に提起されてくるには、そもそもまず、端緒において、この両面でのそれぞれに深い信念があることを前提にしています。

　自分の読み――あるいは読むときの自分の感じ――に対する信念だけあって、はずという、著者らしい著者としてのA氏に対する信の心が無ければ、本文の字句に対する具体的な疑問がかりに起ったとしても、その疑問は、ミスプリか思いちがいだろう、といったかたちで、本文に勝手な改

訂を加えて安直に読むことで、解消してしまうでしょう。熟読・熟考によって解明すべき箇所・具体的な事実そのものが、消えてしまう。自負――じつは他者一般に対する浅信――からくる本文の読みとばし・粗読です。

　もっと粗雑に、一読明快に目に映るかぎりで読みとばしてなんらの疑問も生じない無神経な人も多いですけれども、それでは本を読んだことにはなりませんね。本文の一字一句に神経をくばって精読し、おかしいとおもわれる箇所のいくつかを発見してその鍵を解こうとするのは、もともと、「はず」というA氏あるいは「A氏ほどの人」への、さらにいえば、A氏もそれに属しているはずの著者らしい著者というものに対する信念が心に働いているからです。駄本ばかり読んでいると、こういうくせが身についてしまいます。本とは「適当に」読み流すべきもの。

　他方でしかし、これとは反対に、著者への信だけあって、自分の読みに対する信念がおよそ無ければ、あるいは、本を信じて自分を抛棄してしまっては、これまた精読はできない。本文を隈なく精読し読み深める労を払って自分の見たところ、自分の疑惑を確かめ、隠された内実に到達してその本を自分の古典として獲得する創造的読書への道は、ここでもまた、閉ざされてしまいます。「適当に」しか本が読めない。

　疑問が出ないというよりも、そもそも、それを疑問として執拗に探索を

してゆくべき事実そのものの発見と確認ですね、ここにはこう書かれている（がそれはどういうわけだろう）という事実が、はっきりとした形で自分の目に映り、確認されてこない。

　愛読者といわれる人のなかには、むしろファンというべきでしょうが、Ａ氏一辺倒で、Ａ氏のものといえば――Ａ氏のものだけは――我を忘れて読みふける人もありますけれども、こういう読み、著者にもたれかかって己れを捨てた耽読（たんどく）は、深読・精読に似て然（さ）に非ず。盲信からくるこれまた一種の読み飛ばし行為つまり本質的には粗雑な読みであって、一字一句本文を精読し、謎を含む（と思われる）ところを見出してその鍵を解く労苦に満ちた「賭け」を重ねてＡ氏の真髄にいたる道ではありません。

　深いところで著者を信じることは必要ですが、自分を捨てて著者にもたれかかっちゃいけない。その時その時の自分の読みをとにもかくにも信じてそこに自分を賭ける。という行為（のくりかえし）がなければ、Ａ氏の本が名著であるゆえんをこの眼で確認し、自分の古典として獲得することは、何回くりかえし読んでも不可能です。

　こういう、読む人自身への信と忠誠を欠いた「盲信からくる粗読」は、その意味で非生産的ですが、それだけじゃない。愛読者としての著者への信の面でみても、こういう読書態度は、Ａ氏を、深いところで信ずるとい

うよりも、むしろ、著者らしい著者、信を寄せるに足る人間の一人として見ていないことを、つまるところ本当にはA氏その人に対する人間的信頼が欠如していることを意味する、といっていい。まともにぶつかってゆくことに危惧を感じる。曖昧模糊としたままに置くことによって保たれねばならぬような「信頼」関係。それは信頼関係とはいえますまい。

以上二つの面での信念に支えられて念入りに、注意深く事実を見るという行為があって初めて、「疑い」が現実に学問的探求の母となるのであって、その裏打ちがなければ、疑いは、漠然とした、消極的で不毛なフィーリングに終って、本文解読の積極的な活動を生む源にはなってきません。

（内田義彦『「読むこと」と「聴くこと」と』による）

問い　右の文章を要約しなさい（二〇〇字以内）。

第四講「要約」する　解答

学問は疑いから始まるというが、その疑いの底に著者への信と自分への信があって初めて、疑いが学問的発見につながる。自信だけがあり著者を信じていなければ、疑問はミスプリか著者の思いちがいだと処理してしまい、熟考熟読にはつながらない。また、著者だけを信じ自分を信じていなければ、疑問として探索すべき事実の発見と確認ができない。二つの信念に支えられて注意深く事実を見ることで初めて、疑いが学問的発見につながる。